

Title	金子喜一論
Sub Title	Life and works of Kiichi Kaneko
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1967
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.40, No.10 (1967. 10) ,p.74- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19671015-0074">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19671015-0074</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 資料

## 金子喜一論

## 中村勝範

明治三十年代におけるわが国の社会主義の勃興に外から拍車をかけたのはヨーロッパの社会主義の影響もあるが、それ以上にアメリカの社会主義の影響は大きかった<sup>(1)</sup>。この場合、アメリカの影響というのは、アメリカで発行された社会主義書籍が輸入されてその影響を受けたものもあれば、アメリカへ渡つたり留学して社会主義者となつて帰国した者も多いことである。またはアメリカに在住したまま社会主義者として活躍し、日本の社会主義者との連絡を通してわが国の運動に多大な影響をあたえた者もまた少なくない。アメリカの社会主義と明治期のわが国の社会主義との関係、また在米日本人社会主義者とわが国社会主義との関係は重要な研究テーマになるものであるが、まだその総合的な研究は現われていない。それでも明治末期にサンフランシスコを中心とする太平洋沿岸に在住した日本人社会主義者・無政府主義者の研究はかなりすすめられており、これとわが国社会主義運動との関係は次第に解明されつつある<sup>(2)</sup>。

本稿でとりあげる金子喜一は、明治三十年代のはじめから同四十

二年までワシントン、ニューヨーク、シカゴといった土地で社会主義の思想啓蒙運動をした人物であり、その間わが国の社会主義者と絶えず連絡をとり、わが国の新聞、雑誌上に寄稿して彼の思想の宣伝につとめた者である。金子喜一の本格的な研究は全く未開の分野である。太平洋沿岸の在米日本人無政府主義者・社会主義者の行動は日本当局によつてかなりくわしく調査されており、その調査資料は今日自由に見ることができ、わが国の社会主義新聞・雑誌に寄稿した在米日本人で金子以上に寄稿した者はいないが、彼の調査は明治四十二年に彼が帰国した時に一回行われただけである。こういう点からも不明な点が多いが、本稿が金子喜一研究の踏台ともなれば幸である<sup>(3)</sup>。

(1) 中村菊男・中村勝範共著『日本社会主義政党史』(経済往来社 昭和四十一年九月)の第一章第四節で、アメリカ文化の明治社会主義に与えた影響について簡単にふれておいた。

(2) 東京経済大学助教授大原慧氏の精力的な諸研究および松尾章一

氏の研究がある。

(3) これまでのところ金子喜一については『神奈川県労働運動史(戦前編)』(昭和四十一年一月)に一七三頁から一七八頁にかけて紹介されたもの以外存在しないようである。

## 一生 涯

金子喜一は明治九年(一八七六年)十月二十一日、神奈川県久良岐郡笹下村松本(現横浜市南区笹下町)に生まれた。家は代々名主をしており、学問的環境に恵まれていた。小学校を卒業し、その後東京に出て早稲田中学校に入ったが中退して築地英和学校(後の明治学院)に入り、徳富猪一郎の書生となつて文学を学び明治三十二年徳富の周旋で『埼玉経済新報』の主筆となつた。この頃、安部磯雄、村井知至、片山潜らが社会主義研究会を組織し、その会員の一人である豊崎善之介のすすめで金子もこの会に入会した。(4)かれは度々出席をすすめられたが会合に出る機会がなかつた。出席できなかったのは地方雑誌の主筆としての仕事に追われていたことと、かれの関心が純文学に限られていて政治、経済、社会については全く関心がなかつたからである。しかし金子はこの当時、わが国の社会主義者によつて広く読まれていたヘンリー・ジョージ(Henry George, 1839-1897)の『進歩と貧困』(Progress and Poverty)やベンジャミン・キーン(Benjamin Kidd, 1858-1919)の『社会進化論』(Social Evolution)を読んでいた。後に金子をして、この二書は彼をして社会主義を知らしめ、社会主義に近寄らしめる要素となつた、と言わ

せている。(6)

金子の希望は、はじめ文学者になることであつた。(7)『埼玉経済新報』の主筆として大いに信用を得て、社主より資金を受けてアメリカへ渡ることになつたが、それまでに彼が特に熱心に読んだものはトルストイとクロポトキンのものであつた。ロシア文学を愛読した彼はトルストイとクロポトキンのものを文学として読んだ。そしてこの二人の精神を尊敬せずにはいられなかつたのである。(8)この頃の彼はまだ階級闘争の意識は抱いておらず、ただ純粋なセンチメンタリズムであつた。そして日本の多くの学生がそうであるように彼もトルストイの教訓を好んでいたから、彼の書くものは詩やロマンチックな物語やスケッチであつた。彼が社会主義を信奉するようになつたのはアメリカへ渡り、ニューヨークやその他のアメリカ東部の都市で苦闘し、学生として調査に従つていく中においてであつた。(9)彼が渡米したのは、はつきりしないが明治三十二年の後半から同三十三年の夏頃にかけての間である。(10)渡米後の金子はヘンリー・ジョージの墓を詣で、あるいはヘンリー・ジョージの子息をフォートハミルトンに訪問している。(11)明治三十六年(一九〇三年)四月二十二日に彼は「米国社会民主党」に入会した。(12)あとでも見るように彼をして社会主義者たらしめた最大の原因は、一方に一人の主婦が二十人の僕婢を召使うをもつて誇りとしているのに、他方においては数知れぬほど多くの立ちん坊がいるという社会のコントラストを目撃してからである。彼の人道的なセンチメントは社会主義に彼を行かしめずにはおかなかつたのである。

明治三十七年(一九〇四年)九月、ボストンからケンブリッジへ行き、そこで横山大観、菱田春草とあう<sup>(16)</sup>。ボストンで一日、二日と過しているうちにハーバード大学へ出てみようというのを思い立ち、同大学への入学の手続きをすませた<sup>(17)</sup>。ハーバード大学で有島武郎と知りあい、金子は有島を「手荒くこずきまわす友だち」になり、有島にとつて金子は「非常に楽になつた人」となつた<sup>(18)</sup>。横山大観、菱田春草と接し、有島武郎と親しく交わるころを見ると文学者希望はぬけきれておらないようである。

明治三十八年(一九〇五年)一月十五日に金子は、ボストンの社会民主党倶楽部(Social Democratic Club of Boston)で彼の生涯の最初の演説をした。その演説のテーマは「誤まり伝えられている日本」(Misrepresented Japan)というものであり、社会主義者としての立場からの演説であつた。彼の演説は終始注意深くきかれ、しばしば拍手さえ湧き、話し終ると多くの質問がでた。ついで二十一日にはボストンの近郊であるブロックトンで再び社会主義の演説をし、その演壇でロシアの社会主義者と握手をして大喝采を博した<sup>(19)</sup>。

明治三十九年(一九〇六年)十月中旬に金子はシカゴに移り、無政府主義者の会合に出席したり、シカゴ大学の図書館へ妻と共に雑誌を読みにいき、時たま社会主義のチラシを雑誌の間にはさんで帰つたり、町で行き交う人にチラシを配布する日々を過していた。そのうちに『シカゴ・ソシアリスト』が『日刊シカゴ・ソシアリスト』と発展すると彼はこれを手伝うようになり、十一月十日頃から正社員として勤務することになつた。彼はこの多幸なる機会を得た

ことを喜ぶのであつた<sup>(24)</sup>。

明治四十年(一九〇七年)五月には、これまで故国の新聞雑誌に書き送つたものを集めて平民書房より『海外より見たる社会問題』として出版した。彼の在米中に出されたものであり、彼の唯一の書物である。その翌六月にはシカゴで月刊雑誌である『The Socialist Woman』を発行した。金子は managing editor であり、彼の妻である Josephine Conger-Kaneke がその editor であつた。この『The Socialist Woman』は一九〇九年(明治四十一年)三月から『The Progressive Woman』と改題された<sup>(25)</sup>。この雑誌の対象とする範囲が広がつたわけである。誌名はかわつたが金子喜一も彼の妻もそれぞれ managing editor であり editor であることにはかわりはなかつた。なおこの間、月刊英字雑誌『革命的日本』を明治四十年秋頃発行しようとしたが財政上の都合で実現できなかった<sup>(26)</sup>。

明治四十二年(一九〇九年)六月、金子は『The Progressive Woman』の巻頭で、病氣となつたのでしばらく仕事をやめて休養しなくてはならなくなつたことを告げた。彼は十年の間、彼の帰国を待ちわびている老いた両親のいる日本へ帰ることを決心したのである。十年のアメリカ暮らしの後に病身をたずさえて帰国することは残念なことであるが、病身や生活のたたかに疲れた身を休めるに故国以上の場所はないのであつた。彼は遠くへだつた日本から時々手紙を書いて、日本の女性がどういふ苦痛を受け、自由のためにたたかっているかを知らせようと約束した。そして、何時アメリカへもどれるかわからぬが、それはいつに彼の健康にかかつていること、日本に

とどまるのは数ヶ月かあるいはもう少し長いかもしれないと述べた<sup>(26)</sup>。彼は結核におかされていたのである。明治四十二年七月に故國の土を踏み、療養につとめたが、同年十月八日死去した。あと二週間ほどで満三十四歳になるという年であつた。

(1) 当局の調査になる『社会主義者沿革』によると「明治八年十月生(右)上巻近代日本史料研究会刊 三二二頁)となつてゐる。しかし The Progressive Woman (Girard, Kansas, U.S.A.), Vol. III, No. XXXII, January, 1910. の Kiichi Kaneko, "Citizen of the World" によれば「Mr. Kaneko was born October 21, 1876, at Saagee, near Yokohama, Japan. となつてゐる。The Progressive Woman の記述が正しいようである。

(2) 前掲『社会主義者沿革』三二二頁。

(3) 右同。前掲 Kiichi Kaneko, "Citizen of the World" によれば東京の月刊雑誌の編集をしていたとあるが、これは埼玉県の方が正しいであろう。

(4) 「子は如何にして社会主義者となりし乎」(金子喜一「海外より見たる社会問題」へ明治四十年五月 平民書房)所収 六一―七頁)

(5) 右同。社会主義研究会第二回会合名簿には金子が出席したことになつてゐるが(「社会主義研究会記事」へ「六合雑誌」第二一五号、明治三十一年十一月二十五日発行) 註4 同文により金子は出席したことがないといつてゐる。また幸徳秋水も金子が研究会に出席したことは一度もないといつてゐる(「社会主義史について」へ「平民新聞」第五十二号 明治四十年三月十九日)及び石川旭山編「日本社会主義史」(三十)へ「平民新聞」第五十三号 明治四十年三月二十日)の「秋水曰く」の中、また石川編・幸徳補「日本社会主義史」へ「明

治文化全集 第六卷 社会篇」昭和三十年十月 日本評論新社)所収三六三頁、三六五頁の中でも明らかである。

(6) 前掲「子は如何にして社会主義者となりし乎」(前掲「海外より見たる社会問題」七頁)

(7) 「子はじめて米國行を思ひたらし當時に於て子が頭腦を支配せし所の者は実に文学にてありし也、露骨に白状すれば子は狭き意義に於ての文学者たり、又たらむを欲して洋行せし也」(右同文、右同書五頁)。また前掲 Kiichi Kaneko, "Citizen of the World" によれば He early chose literature, however, as his profession. . . .

(8) 前掲『社会主義者沿革』上巻三二二頁。

(9) 「トルストイとクラポトキン」(平民新聞 第六十四号 明治三十八年一月二十九日。これは前掲「海外より見たる社会問題」四八―五四頁に所収)

(10) Kiichi Kaneko, "Citizen of the World"

(11) Ibid.

(12) 前掲『社会主義者沿革』上巻三二二頁には「三十四年中渡米」とあり、復刻『光』(明治文献資料刊行会 昭和三十五年十二月)の「解題」した西田長寿氏も「明治三十四年中渡米」としてゐるが、これは誤りであろう。なぜならば金子は明治三十三年十月五日発行の「日本人」第一二四号に「よしあし草」という文章を寄稿してゐるが、それには「米國ハドソン川のはとりに於て」という副題がある。これで見ると、いかにおそくも明治三十三年夏には日本を發つてはなくてはならない。

(13) 「旅窓雑吟」(「日本人」第一四七号 明治三十四年九月二十日)中に「ヘンリージョージが墓にまうじ」という詩がある。

(14) 「ポストン便り」(直言 第二卷第十一号 明治三十八年四月十

六日)

(15) 前掲「予は如何にして社会主義者となりし乎」(前掲『海外より見たる社会問題』所収 十頁)

(16) 「ボストン便り」(平民新聞 第五十七号 明治三十七年十一月十一日)

(17) 「ボストン便り」(平民新聞 第五十九号 明治三十七年十二月二十五日)には「入学の手續きを経た」とあり、また前掲『社会主義者沿革』上巻にも「ハーバート大学ニ入り四十年八月同校ヲ卒業シタリ」(三二二頁)とある。

(18) 柳田・勝本・猪野編『座談会大正文学史』(岩波書店 昭和四十年四月)二〇六、一一五、一一六頁。括弧内は本多秋五の発言。ききあげた西田氏の『光』解題中の金子の紹介では、ハーバード大学へ入学後社会主義者になつたように記されているが、大学入学より一年前に社会民主党に入党している。

(19) Dear Comrades (The Chokugen, Vol. II—No. 3, February 19th, 1905) 及び「社会主義の処女演説」(直言 第二卷第六号 明治三十八年三月十二日)

(20) 右同「社会主義の処女演説」及び「金子喜一氏の演説」(直言 第二卷第八号 明治三十八年三月二十六日)

(21) 「シカゴ便り 第一信、第二信」(光 第一卷第二十九号 明治三十九年十二月五日) 及び「シカゴ社会党日刊新聞発行物語」(平民新聞 第一号 明治四十年一月十五日)

(22) この書については当時の社会主義諸新聞に何回か広告が出ている。また本書には四頁からなる幸徳秋水の序、二頁からなる堺利彦の序がある。明治社会主義研究上重要な文献であると思われるが、大原社会問題研究所編『日本社会主義文献 第一輯』(昭和四年九

月)にはわずか二行の説明が附されて掲載されているのみであり(六八頁)、細川嘉六監修・渡辺、塩田編『日本社会主義文献解説』(一九五八年二月 大月書店)では掲載されておらない。唐沢隆三氏が唐沢氏の個人誌である『柳』第五卷第十号(昭和三十四年八月)にその目次と幸徳の序を紹介している。

(23) われわれが今手にしている The Socialist Woman は一九〇四年四月発行の第一卷第十一号以降のものである。これを逆算していくと、月刊雑誌であることから創刊号は一九〇七年六月に発行されたものと思う。なお第十一号から十四号までの発行所及びその所在地は The Socialist Woman Pub. Co. 619 East 55th Street, Chicago, U.S.A. である。しかし十五号からは発行所名はかわらぬが、その所在地は Girard, Kansas, U.S.A. となっている。

(24) われわれがいま手にしているのは The Socialist Woman の第二十二号か一九一〇年五月の第三卷第三十六号までである。The Progressive Woman の発行所とその所在地は The Progressive Woman Pub. Co. Girard, Kansas, U.S.A. である。

(25) 大阪平民新聞第十一号(明治四十年十月二十日)に掲載されている金子から森近運平への書簡。

(26) My Farewell Words (The Progressive Woman, Vol. III, No. XXV)

(27) 前掲『社会主義者沿革』上巻 三二二頁。なお死去の年月日は Kiichi Kaneko, "Citizen of the World" の記事とも一致する。

## 二 人道主義思想

アメリカにわたり、ニューヨークその他のアメリカ東部の都市で

生活の闘いはじまるまでは金子の思想はまだ社会主義に近づいていなかった。その頃の彼の心を満たしていたものはトルストイ流のヒューマンイズムであつた。諸々の社会的束縛からの人間性の解放を唱えるヒューマンイズムの立場が、この頃の金子のものであつた。渡米した彼がまずしみじみと感じたことはアメリカは第二の故郷であるということであつた。

ドイツ人からは品位のない国民とあざけられ、イギリス人からは爵位のない新平民が跋扈する国と罵られ、古い歴史をもつ国からは新参者とさげすまれ、彼にとつても数多くの氣に喰わぬことがあつてもアメリカは金子の第二の故郷となるものであつた。日本では何事も日本至上主義、忠君愛国でなくては出世ができず、この風潮にさからえば不敬であり非国民といわれて堂々たる自己の主張はなしえない状態である。これにたいして「堂々乎として極端なるデモクラシーを主張し、非帝国主義を鼓吹し、過激にして殺伐なる無政府党をもいれて、緯々閑天地ある<sup>(1)</sup>」は世界広しといえども、アメリカ以外にはないと彼は考えるのである。アメリカこそ自由、民主政治、個人主義、言論の自由の楽郷であり、ロシアや日本やドイツ、イギリスの及ぶところではないとする。

この自由と民主主義の溢れるアメリカにおいて彼が考え主張したことは、人間社会の改善というものであつた。アメリカへ渡つた年に、彼は短い英文詩をかつて新聞に寄せた。それは、トルストイとクロポトキン<sup>(2)</sup>は正義の二大戦士であり、皇帝の王座の前へ勇敢にそして大胆に革命の旗をなびかせてあらわれたという文字ではじまる

ものである。<sup>(2)</sup>この頃の金子の志望は文学者になることであつたから、クロポトキン、トルストイの書物はロシア文学として読んでいたのであるが、彼がクロポトキンやトルストイについて論ずるときはかれらの社会批判的な面にだけ触れるのだつた。今日、われわれが眼に触れることのできる金子の書いたもので、社会的な発言以外のものは全くといつていくらいらない。彼は文学者を志望しながら、いつしか社会評論に足を踏み入れ、その道を歩んでいつたが、それは結局社会的な束縛から人間性の解放を唱える彼のヒューマンイズムが、彼にとつては文学の形をとるよりも社会批評の形をとる方が発表の上で主体的にも、また客觀的にも容易であつたからであるう。

彼は社会評論を通して社会改革の方法を論ずる。カール・マルクスを代表者として主張される社会主義は経済的救済をもつて社会問題の解決策としている。つまりパンとバターの問題をもつて人間社会が改善し得ると考えている。たしかに経済的救済は大事な問題であるが、それだけをもつて社会問題が解決するとは考えない。倫理的救済もいつそう必要であると金子は考える。なぜならば人間は活ける動物であるから食わなくてはならず、住まなくてはならず、着なくてはならないから、この点で経済的改革は必要不可欠である。と同時に、人間は良心を生命とするものであることを忘れてはならない。教育、道徳、宗教の問題として社会問題をとらえる必要がここに在る。社会問題を物質的側面からだけでとらえることに強く警戒してやまぬのである。<sup>(3)</sup>

パンとバターだけで社会を改善しようという考え方、あるいはパンとバターだけが人生の問題であるという考えには金子は賛成しなかつた。ドイツのリーブクネヒトは大学生時代に一つの専門の研究をせず人生問題を研究して余念がなかつた。リーブクネヒトは予はパンとバターの学問はせずただ誠心誠意人間の問題をきわめた、といったが、かくの如きが理想であると金子はいう。一つのもを専門としてそれにとらわれてはいけないうのである。たとえば法律政治を学ぶ者の思想は浅薄にして姑息であつて、妄りに枝葉を追つて根本を忘れてゐる。世に法律政治あるを知つて人類があるのを知らない者すらゐる。彼等の法律政治は人のための法律政治ではなくして、法律政治のための人類である。こういう専門の学問でなく、人が修めなくてはならぬ学問というのは法律や経済や政治でなく、また神学、哲学でもなくて、あらゆる学問の間に見出さるべき人道であり、人間学でなくてはならない、という<sup>(4)</sup>。

金子が人道を学び、人間学を学ばねばならぬというのは、象牙の塔の中で書籍の虫になれということではない。むしろ逆である。彼が人道主義のために生涯の総てを捧げたと評している者は、トインビー、モリス、キングスレー、サン・シモン、マルクス、リーブクネヒト、ウエスレー、チャンニング、カライル、ラスキン、ブース、トルストイ、クロボトキン、フレデリック・ハリソン、ステッド、クロスビー、ヘンリー・ジョージらである。ここに挙げられている欧米思想家・改革者は多士濟々であつて、どう考えても一つの枠には入れることができない。中には思想・主張の上において相争い、相

対立する者も多い。このように矛盾し対立する者をもつて人道の戦士だとした一つの理由は金子の思想そのものが純化しておらなかつたからである。しかしただ彼の思想そのものが混迷していたとだけ言い切れないものもある。彼には彼の言い分もあるのである。

金子は、この広い世の中のことを説明するのにただ一つの主義で説くのは不可能であると考えた。無政府主義者は無政府の世になればそれで人生は大平無事であると信じ、キリスト教信者はキリストの福音だけを信ずれば天国は近づくと言き、社会主義者は社会主義が実現されたら人類の幸福は得られるという。しかし、世の中はそれほど容易なものではない。キリストの理想は二千年後の今日ですら充分行われていない点を見てもそのことは明らかである。したがつて人間は現在の中の最も多く欠ける所を見て、それを補える最善を応用して人類を進化せしめていかななくてはならない。こういう立場から見れば、世の中のいかなる主義にも多少の善は含まれているから、その善の部分は生かして人類の進化に应用させるべきである。

『バイブルにも善言はあり。』『資本論』にも聞くべきことあり。『進歩と貧困』にも、『純正批判』にも『コラン』にも学ぶべきことは沢山ある。而して又聞くべからざることもあるのである。要は社会と人と時代とをみてとるべきと取らざるべきとを定むるより他ないであらう<sup>(5)</sup>。

これが金子喜一の立場である。トルストイは、社会主義者からは力強き加担者として、無政府主義者からはその哲学的側面を代表せる者として、キリスト教者からは偉大なる預言者として見られたが、



トルストイ自身はそのどれでもなかつた。トルストイをもつてそのうちのどれか一つだときめつけるのは誤りである。トルストイは社会主義の中にも、無政府主義の間にも、キリスト教にもその輝いてい入人道の光を見たのである。その光のみを見て、その暗い所は見なかつたのである。トルストイの根底を流れているのは実にヒューマニティーの大流である。(7)金子は以上のようにトルストイを評価し、トルストイの歩んだ道こそ人道の道であるといつた。

金子のいうヒューマニティーとは、誠心誠意人間のために奉仕する実践の思想であつた。そのためには一つの思想にとらわれることなく、あらゆる思想から社会的問題を解決するのに役立つものは貪欲なまでに吸収しようというのであつた。金子の貪欲さはわかるが、対立矛盾する思想家の思想を、彼の立場から見ても善しとするものを切りとつてきて、それらを坩堝に入れて練り直せば人類の進化に應用できるというのは、あまりにもユートピア的であるといえる。しかし、このユートピア的で、楽観的であるところが金子喜一の一つの特徴である。

「今日の社会改革家の見解は多くは否定的にして、現社会の価値を余りに悪しく見過すの病ありと、盖し如何に盲目なる人と雖も苟も歴史を繰り返して見る時は、幾多の異なる点に於て、人間社会は進歩してありてう事を認定し得られむ、然り人類社会は疑うまでもなく、絶えず進歩てうゴールに向うて走りてありし也」(8)

といい、また、いりくんでいる人間界の現象は容易にその進歩退歩を判別し難いが、十六世紀は十五世紀にまさり、十七、八世紀は十

八、九世紀より劣れることを承認すると金子はいふ。かういふように観察してくる金子は現世紀の疾病を見ても失望落胆しないのだと言ひ切ることができるのである。この楽観主義は、幸徳秋水の古往今来東洋泰西三千世界十億土自分の如き不平家はまたとあるまじと思う、自分はやや物心ついてから二十歳になる今日まで一日寸時といえども不平の雲霧に立掩われざることなく、愉快得意満足といふことは爪の垢ほども知らない(9)という底抜けの悲観主義と好対称をなす。また挫折の連続の生涯の中で、病的なまでの被害者意識をもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるものすべて焼きつくさんと意気まき、五人や十人を殺す剣や百人や千人を殺す爆裂弾では気が安まらない、願ひは地球を黒熱焦土と化す天裂の靈火となることであり、地上のすべての物を崩壊しつくす地震となることであるという心境にまでなつた赤羽巖穴(10)とも金子喜一は対称的である。

金子には挫折感もないし、終末意識もなくだから悲観主義でもない。楽観主義が彼の特徴であるが、家居して夢想に耽るというのではなく、彼のヒューマニズムは実践的であることを要求した。書物だけを読んで静思を快とするのは道楽哲学者であるといつて排斥した。人間のことを静思し、思惟するだけではヒューマニティーとはいえず、いたずらに議論に精緻であつても、情熱なく氷のような者はヒューマニストとはいえない(11)のである。金子によつてあげられた欧米の思想家、文芸家、社会運動家はいづれも社会的実践家であつたのは、ヒューマニズムは道楽哲学者の言葉の遊戯であつて

はならないとする彼の立場から選ばれたものである。思想の面では矛盾があつても、実践家であつたところでは人選に一つの規準があるのであつた。

- (1) 前掲「よしあし草」
- (2) 前掲「トルストイとクラボトキン」。この論文は明治三十八年一月二十九日の『平民新聞』第六十四号に掲載されたものだが、論文の冒頭に「Two Great Soldiers of Justice, Appeared at the Front of Czars throne, Bravelly and holdly they arouse, Lifting up the flag of revolution. という文字ではじまる四節からなる詩がのつてゐる。これは金子が渡米した年に「当時シカゴ市から発行してゐた、露国革命党の機関新聞たる『フリー、ソサエティ』紙に掲げた」ものであるという。
- (3) 「社会問題の物質的側面」(日本人 第一四一号 明治三十四年六月二十日)。この論文ではまた、経済論にのみ耽らず、文学の樂園に悠遊することをすすめている点で、文学者志望の金子の面目はあらわれている。文学は読者に慰藉と精神的教養をもたらす、というのが金子の主張である。
- (4) 「ヒューマニチーを論ず——無名氏に与うる書——」(日本人 第一五一号 明治三十四年十一月二十日)
- (5) 右同。
- (6) 「予は如何なる社会主義者なる乎」(前掲「海外より見たる社会問題」一六五頁)
- (7) 右同(右同書 一六三—一六四頁)
- (8) 前掲「社会問題の物質的側面」
- (9) 幸徳秋水「後のかたみ」(塩田庄兵衛編『幸徳秋水の日記と書

簡」所収 一九五四年 未来社 一八頁)

- (10) 赤羽巖穴「熱火冷火」(『新紀元』第十号 明治三十九年八月十日)
- (11) 前掲「社会問題の物質的側面」

### 三 社会主義思想

渡米以前に金子は社会主義研究会への入会を誘われたというが、それは彼がトルストイ流のヒューマニズムを主張していたところに原因があつたと思われる。渡米した彼は偶然のことからイリー(Richard T. Ely)の『近世独仏社会主義』(French and German Socialism in Modern Times)を読み社会主義へ近づくことになるのである。ひきこまれるようにして彼は二度、三度と読み返した。読み返すことにそこに描かれている社会主義者たちが昔時の使徒のように熱誠と献身とをもつて救世的大精神を発揮していることを知り感動した。<sup>(1)</sup>このように彼は社会主義には読書から接近したが、彼の思想を根底からゆさぶつて彼をして社会主義者たらしめたものがあつた。それは一言でいうと社会における差別、社会的矛盾の存在にはつきりと気がついたことである。

醜業婦が白昼街頭を横行すること、失業者の存在、あわれむべき工女の境遇をきいたこと、立ちん坊の群、ユダヤ人やイタリア人街の貧兒とかれらの悪習慣等が彼の行く先々で発見された。これに対して他方では壮麗なる建物、快走する自動車、一人の主婦が二十人の僕婢を召使うことをもつて誇りにしていること、百万長者が女優

と結婚すること、富者の所有する遊船の一カ月の費用が数万円であること、有名なビショップが財産ある寡婦と結婚したこと、平等であるべき教会の椅子が富者の金で専売されること等が彼の眼に入るのである。このコントラストを見て、かくの如く極端な両極に分解するのは必然であるのか、という疑問をもつようになり、これを解くために学者にきいたがなんら解決策はあたえられなかつた。そして金子の「平生のヒュマニタリ安的傾向は子を導きて終に社会主義に往かしめた」のである。すでに記したが一九〇三年四月二十二日、彼はアメリカ社会民主党に入党したのである。

アメリカに対する金子の觀察は変化している。渡米直後は、世界に冠たる自由な国であり、アメリカは彼の第二の故郷であるといつた。アメリカの自由にして進歩的なる教育制度は日本も多に学ばなくてはならない。日本では海外視察とか留学生はヨーロッパに重点をおいているが、アメリカを軽視するのは誤りであると此國を礼賛する。渡米後、三年経過しても民の声はよくアメリカ政治に反映されていると信じていた。<sup>(4)</sup> こういう点で、幸徳秋水が社会主義者になつたコースとは異なる。幸徳の場合は、日本においては正当なる能力を有する労働者が職を失つて飢えるということがないからこの点で社会主義を必要とする度合いは少いが、腐敗墮落している政治社会を一新するための唯一無上の主義として社会主義の急要を感じる度合いは欧米以上だといつて社会主義者になつていつた。<sup>(5)</sup> 幸徳は政治への関心から社会主義者となり、金子は下層階級の貧困、悲惨を突見して社会主義者となつた。

幸徳の社会主義とのかかりあひは、政治的関心から社会主義者となつたところから予想されるように政治権力奪取的な色彩がきわめて濃厚である。政治権力に対するストレートな攻撃批判が読者の目をひくのである。<sup>(6)</sup> これに対して金子はどうかといへば、たとへば米国における離婚問題を論じ、宗教家は口を極めて徳義の墮落を唱えているが、それだけでは問題は説明されぬ、離婚は婦人の解放の一面があるのだと弁護する。<sup>(7)</sup> あるいはまたアメリカの大学や教会は少数富豪の寄附によつて維持されているから牧師も教授も自由にして大胆なる説教、言論、学説をとかない、つまり教会も教授も買収されているのだと批判する。<sup>(8)</sup> そしてまたロックフェラーがアメリカンボード外国伝道会社へ十万円寄附したことについてアメリカ国内でこれを拒否すべし、いや受けるべしという賛否両論が出たが、この論争は金が教育や宗教を支配している時代に妄りに金を受けることへの反省のあらわれとして結構なことであるという意見である。<sup>(9)</sup> さらにアメリカにやつてきたゴルキーが、ニューヨーク湾に入つたときは自由の楽郷だと思つたが、やがて国内を觀察してアメリカ人の物質的生活の贅沢さに驚かされ、黄金に支配される生活を批判した記事を詳細に熱意をこめて日本の同志へ書き送るのである。<sup>(10)</sup>

金子の論文の中から、金力支配とパンの問題に汲々としていてこれを批判したり、女性解放を論及したものだけを故意にとりあげたのではない。金子の論文中、注目作と考えられる論文を選び出しておいて、その後にはアトランダムにとりあげてもいま紹介しようなものとはそう変化ないであろう。彼は政治権力批判をあまりしな

つたし、また資本主義制度のもつ搾取について論及するわけでもない。アメリカ礼賛からやがてアメリカ批判になつても、金力支配下にある教会、教育を批評するのであり、物質支配のアメリカ生活を批評するだけである。あるいは渡米当時は言論の自由な国であると考えていたアメリカが意外と言論が不自由な面があることを知つてこれを紹介するのである。<sup>(11)</sup>

社会主義者金子喜一がアメリカを批判する時、アメリカの資本主義経済の分析、そのもつ矛盾について論ずるのでなく、アメリカの物質文明批判に偏つていたことは以上述べてきた通りである。それでは次に金子は日本をどのように見たであろうか。彼はアメリカ人の眼に写り、アメリカ人によつて分析された日本をつぎのように紹介する。

あるアメリカ宣教師は、日本には学問及び信仰の自由がないと批判したのに賛成して金子は、アメリカにおいては政治上の自由は獲得しついで学問の自由を獲得し終ろうとしているのに、日本においてはアメリカの戦い古した政治上の自由を獲得する戦いをすすめねばならないと日本の後進性を指摘する。日本における鉄道、学校、郵便電信等の発達は素晴らしいものがあるが、日本人のセンチメントすなわち自然観、帝室観、人生観は依然としてかわらないというアメリカ人学者の分析を紹介して金子は日本人の皮相は変化したが大実相は変化しない、実相の変化がないかぎり日本人は西洋文明を理解したとはいえないのだという。<sup>(13)</sup>そしてさらに進めて、日本人の性質は「感情的性質」(sentimental temperament)であつて、これをか

えないかぎり科学時代に勝利しえない。科学的教育、科学的精神、事実を貴ぶ教育が日本において必要であるというのがアメリカ人の日本批判を紹介した文章の金子の結論である。<sup>(14)</sup>日本人の国体思想、忠君愛国思想に対する批判はアメリカ人の批評を通して存在しないわけではないが木下尚江が執拗にこの問題にメスを加えたような鋭さはとうていうかがえない。アメリカ人の日本人移民を排斥する問題にふれても、アメリカにきた日本人がアメリカの政治的精神に適應できないで、終始慕郷の情にかられ、「錦衣故郷」の精神のままでいるところにも原因があるといつた。日本人排斥の裏面には日本人の弱点が潜んでいるというのである。<sup>(15)</sup>良識的な批評であつて、明治の社会主義者でなくてはできないというものではない。

全体を通じて金子喜一の言論批評は良識的である。彼は明治の社会主義新聞にも多くの論稿を寄せたが、新聞のトップを飾つたのはただの一篇しかなかつたということが、彼の主張の内容を象徴するかもしれない。トップを飾つた唯一の論稿は、日本政府が社会主義者を弾圧し、とりわけ社会主義者の言論・思想の自由を妨害することに抗議したものである。<sup>(17)</sup>たしかに堂々たる主張だがそれは痛烈なる批判といえるものではなく、良識的な政府批判である。良識的な発言を通して日本の在るべき姿を金子は追求していたことはたしかであるが、日本改革の積極的なプランを一読して理解できるというまとまつたものはない。日本批判を越えて、日本における望ましい傾向として彼がたたえたものはある。それは日本においてトルストイの影響が顕著にあらわれたということであるとした。たとえば幸

徳伝次郎、堺利彦、内村鑑三、徳富健次郎、木下尚江らはいずれも日本の著名な人物であるが、彼等はいずれもトルストイアンであるというのである。日本においてはトルストイの影響は思想家や文章家の間に一日ごと一ヵ月ごとに大きくなつていき、ついにいつの日か陸海軍の力をもつてはなしえなかつたような日露兩國の理解をトルストイの影響がもたらすであらう、といつた。<sup>(18)</sup>

彼は自分を社会主義者であるといつたが、「共産党宣言」は一頁も読まなかつた。一頁も読まなくとも社会主義者であることをいつこうにさしつかえないと断言した。彼はマルクスやエンゲルスのような唯物論的な社会主義者ではなく、またキングスレーのようなキリスト教的な社会主義者ではないといつた。彼の社会主義はヒューマニティーの社会主義であり、それは資本の私有を廃止して共有を説くことをもつて能事終れりとするものではないとした。「何事でも凡そ人間社会を導びいて、進歩と幸福とを持ち来す者は吾が党の士である。個人主義もある点に於て可なり。無政府説もある場合に於て可なり。バクニン可なり。ヘッケル可なり。マルクス可なりである」<sup>(19)</sup>。決して一つの主義に妄従する必要はない。もしマルクス主義に妄従するのが社会主義なら彼は社会主義者という名を辞退せねばならぬという。彼は自分のとなえるヒューマニティーの社会主義の善所はどこまでも主張するが、なにごとく社会主義の世になつたならば憂はなくなるといふ我田引水的な筆鋒をすることを平生心よしとしなしいというのが彼の信条であつた。

人間社会の進歩と幸福をもたらすものが彼の社会主義だという

が、その言葉の意味は理解できても、彼の社会主義の内容は漠としてつかみどころがない。ただ彼はトルストイによつて社会的な面に眼をむけるようになったのであり、トルストイの影響から脱出することは終生できなかったことだけはわかる。トルストイ自身がさまざまな思想を混合させており一つの主義だけを金科玉条としなかつたように、トルストイに影響された金子喜一もさまざまな考えの善所を寄せ集めてヒューマニティーの社会主義だと称した。しかし、トルストイがキリスト教を理解し、無政府主義思想に苦悩し、あるいは反戦論や非婚論、菜食主義等々を唱えるときに苦悩したほど金子喜一がヒューマニティーの社会主義をつきつめたかどうか疑問である。

(1) 前掲「予は如何にして社会主義者となりし乎」(前掲「海外より見たる社会問題」所収五一六頁)

(2) 右同(右同書一〇頁)

(3) 「学ぶべき米国」上・下(平民新聞 第六、七号 明治三十六年十二月二十、二十七日。前掲「海外より見たる社会問題」所収一四二—一四七頁)

(4) 「ワシントン所感」(平民新聞 第三号 明治三十六年十一月二十九日。前掲「海外より見たる社会問題」所収二五—二八頁)

(5) 幸徳秋水「現今の政治社会と社会主義」(六合雜誌 第二二三号 明治三十二年七月)及び中村勝範著「明治社会主義研究」(世界書院 昭和四十一年十二月)所収の「第二章 反議会的社会主義の源流——幸徳秋水の生涯と思想——」(五五頁、五九頁)参照。

(6) この点は拙稿右論文で論じた。

(7) 「米国に於ける離婚問題」(家庭雜誌 第三卷第五号 明治三十

- 八年五月二日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一一一九頁)
- (8) 「買収されたる米国の大学及び教会」(直言 第二卷第十五号 明治三十八年五月十四日。前掲『海外より見たる社会問題』所収六二一六七頁)
- (9) 「密附金十萬円の倫理」(直言 第二卷第十六号 明治三十八年五月二十一日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一五一一一五頁)
- (10) 「ゴルキーの見たる米國」(光 第一卷第二十四号 明治三十九年十月十五日)
- (11) 「言論の不自由なる米國」(新紀元終刊号 明治三十九年十一月十日。前掲『海外から見たる社会問題』所収一六八一七四頁)
- (12) 「外人の見たる日本人(一)」(平民新聞 第八号 明治三十七年一月三日)
- (13) 「外人の見たる日本人(二)」(平民新聞 第九号 明治三十七年一月十日。前掲『海外より見たる社会問題』では「ラッド博士の日本人観」として所収、六七七〇頁)
- (14) 「外人の見たる日本人(下)」(平民新聞 第十号 明治三十七年一月十七日。右同書所収七一七四頁)
- (15) 拙稿「日本の社会主義の課題——木下尚江論——」(前掲『明治社会主義研究』所収)
- (16) 「日本人排斥とは何ぞや」(直言 第十七号 明治三十八年五月二十八日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一五五一六一頁)
- (17) 「日本政府に問う」(大阪平民新聞 第十号 明治四十年十月二十日)
- (18) What Tolstoi has done in Japan (The Progressive Woman, Vol. II, No. 16, September, 1908.)

(19) 前掲「予は如何なる社会主義者なる乎」(前掲『海外より見たる社会問題』所収一六七頁)

### 結 語

物わかりのよかつた名君のような有島武郎をハーバード大学で手荒くこづきまわしたのが金子喜一であつた。有島にとつて金子と親しくなれたことは非常に榮になつた、有島の友人の中では金子がいちばんの人物だ、といわれる。本当は有島にとつてもつと「悪魔的な人物」、「悪魔的なことを吹き込める人」が友だちになれたらよかつたといふ<sup>(1)</sup>。しかし以上見てきたように金子は良識豊かなヒューマニストではあるが決して「悪魔的な人物」ではない。明治日本の中樞をなしていた天皇制を批判した木下尚江、日本の革命のためには暴力をも辞せずとした幸徳秋水、日本はおろか世界そのもの、地球そのものを破壊させないではおかないといつた赤羽巖穴にくらべれば金子は、どこまでも良識的である。金子のもつとも鋭い日本批判は「社会主義者の見たる日本」<sup>(2)</sup>であるが、そこでは日本の歴史は戦争の歴史であり流血の歴史であつて決して平和な国ではないこと、労働者の生活は低くストライキが多いこと、言論の自由が抑圧されているのが日本であるとされる。日本政府は末松謙澄、金子堅太郎を海外に派遣して日本の文明、富強、正義人道を誇説させているが、決してそのような素晴らしいものではないといふものであつた。しかし、これと他の日本の社会主義者の言論と比較して一等秀れて鋭利であるといふものではない。というより普通の発言であつたとい

えよう。

幸徳秋水は金子を評して「世界主義者也、非軍備主義者也、非愛國者也、共產主義者也、自由思想家也、君は旧来の固陋なる道德、偏僻なる習慣、圧制なる法律に反抗して、総ての人類の解放自由を企図せる人道家也、君の眼中、亦民族の区別、国家の境域なるものなし」といつた。こまかく分析するとたしかに幸徳のいう通りであるが、一言でいえば西川光次郎が評したように「自由思想家」ということになる。あるいはヒューマニストといつてもよいであろう。金子には社会主義の理論を展開したものは全くといつてよいからいない。もつとも社会主義の理論は全く知らないと自他共に称した木下尚江は明治の社会主義者の中で最も人気があり、また当局からは筆頭の危険人物として警戒された。したがって社会主義理論を知っていたかどうかは社会主義者であつたかどうかの基準にならぬ。

自由思想家あるいはヒューマニストといつてよい金子喜一は、社会主義の上にかなる貢献をしたであらうか。

第一はアメリカから金子ほど数多く積極的に寄稿してきた者はいなかつたことから、彼がわが国の社会主義者にアメリカの情勢を提示しアメリカの社会主義の動向を伝えた点があげられよう。

第二は日本の社会主義者と密接に連絡をとつて日本の運動をアメリカに紹介した功績が考えられてよいだろう。

社会主義運動は初めからきわめて国際的な交流をしていたが、金子がアメリカの新聞に寄稿し、また自ら『日刊シカゴ・ソシアリス

ト』に入社して仕事をなした国際的人間であつたということも第三に考えられよう。

第四には『The Socialist Woman』及び『The Progressive Woman』の *managing editor* としてアメリカはもとより世界婦人解放運動の啓蒙活動をしたということもあげられよう。

そして最後に、以上の活動を総括して直接間接にわが国社会主義運動に貢献したのである。

ヒューマニティーをとく彼は、日本という祖国を越えて世界人になろうとした。自分の国は富士山があり芸者がある国ではなく、ヒューマニティーが高揚している国であり、男女が彼等の権利を享受している国である。自分の国では何人も支配されず、王座も称号も怠惰な貴族もないところであり、ちょうど青空が広く自由に伸びているように人間は一人で純粹に人間として立つていけるところである。と諷つた金子である。彼自ら「世界の一市民」であると称し、まさにそう在りたいと努力した。彼が死去したとき、彼が主宰していた『The Progressive Woman』は金子の死を報ずるに『*Citizen of the World*』という文字を使つた。しかし彼が死去したのは、日本においてであつた。病身を養ひ、生活の闘いに疲れた身体をいやすには老いたる父母のいる日本にまざるところはないといつて帰国し、二ヵ月余り後には永遠の眠りについたのである。

(1) 前掲『座談会大正文学史』一六頁の中の本多秋五の発言。

(2) これは初め北米の進歩的月刊誌『The Arena』の一九〇五年五月一日号に発表したものである(直言 第二巻第九号 明治三十八年

四月二日号の広告)。それが後に『直言』第二卷第二十号(明治三十八年六月十八日)に訳載された。

(3) 前掲『海外より見たる社会問題』によせた幸徳の「序」。

(4) 西川生「金子喜一君の社会主義」(社会新聞 第一号 明治四十年六月)

(5) これは New York Journal へ寄稿した英文詩である。日付不明。前掲 Kichii Kaneko, "Citizen of the World" の冒頭に引用されている。

(6) 前掲「日本政府に問う」の執筆者名の肩書に金子は、この「世界の一市民」なる文字を入れている。

(後記) The Socialist Woman, The Progressive Woman は渡辺悦次氏の御厚意により同盟資料室保存のものを閲覧した。記して感謝する次第である。